

芦北ひまわり 第4学校贈呈記念特別号



新しい校舎の前で記念撮影



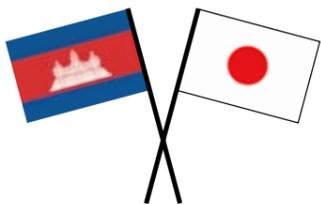
カンボジア派遣事業

平成21年12月24日～29日



芦北ひまわり第4学校贈呈

芦北町長 竹崎一成



芦北町国際交流協会を中心に取り組んでおります「カンボジアに学校を贈る運動」では、町民の皆様をはじめ善意ある多くの方々の御協力により、この度、念願の4校目を贈呈

することができました。

カンボジアの首都プノンペン市から車で約2時間半のプレイベン県スワイサカウ村で行われた贈呈式には、私を団長に、議会代表、小・中・高生、先生方、国際交流関係者、同行取材記者の総勢31名が参加し、現地カンボジアの子供たちとの交流を深めてまいりました。

私自身は、平成13年3月の1校目の学校贈呈式以来、約9年ぶりのカンボジア訪問となりました。プノンペン市内においては、9年前にはほとんど見られなかったビルが立ち並び、道路事情も格段に向上しており、経済発展が著しく目を見張るものがありました。しかし、地方部は未だインフラ整備も遅れており、大半の人々が1日1ドルという低賃金で暮らしているなど、生活水準に大きな格差が

ある事を実感しました。

贈呈式では、カンボジア王国プノンソック教育省長官をはじめ、プレイベン県副知事及び市長など関係者多数の御臨席のもと、600名を超える地元住民の熱烈な歓迎を受ける中で、私達もともに新校舎完成の喜びを分かち合うことができました。

今まで古く暗い校舎で過ごしていた子供たちにとって、素晴らしい贈り物になったものと思います。また、私達にとりましても、喜びに満ちたカンボジアの子供たちの笑顔をみて、この活動を続けてきて本当に良かったと思わせてくれました。今後も、活動の理念を忘れることなく5校目の建設に向け募金活動に引き続き取り組んで参ります。

今回、派遣された子供たちも、カンボジアの空気を肌で感じ、現地の子供たちと触れ合うことで、多くの

ことを学んでくれたのではないかと思います。この貴重な経験を活かし、時代をリードする国際的な視野を持った、心豊かな人間として成長してくれることを期待しています。本町では、平成8年以降本格的に国際化・国際交流事業に取り組み、このカンボジア学校建設・派遣事業をはじめとして、多くの成果を残して参りました。15年目を迎える今日、これまで積み上げてきたものを土台として、時代の変化に合わせて、今後に向け新たな一歩を踏み出して参ります。

終わりに、「JHP・学校をつくる会」代表の小山内美江子様をはじめ、独立行政法人国際協力機構カンボジア事務所ほか、関係者の皆様、そして、これまでの募金活動に御支援、御協力いただきました皆様から感謝申し上げます。



ブンソック教育省長官から感謝状を手渡される竹崎町長



① 芦北ひまわり第4学校の教室内 ② 児童擁護施設CCHの子供たちと ③、④ 芦北ハイヤを現地の子供たちと踊る ⑤ リコーダーでカンボジアの民謡アラビヤを演奏 ⑥ プノンペン市ソントーモック小学校（児童数4300人）の授業風景 ⑦ 植樹用の水を井戸から汲み出す参加者 ⑧ 折り紙で交流

カンボジアの子ども達について

佐敷小6年 永里優香子

私は、カンボジアに行き、カンボジアの子ども達を見て思った事があります。最初に、背が低い子が多いなあと思いました。そして、背の低い子が多いだけでなく、やせている子も



カンボジア派遣に参加した児童・生徒の感想文

カンボジア研修の感想

大野小5年 木川翔太

ぼくは、カンボジアの学校で交流することに対し、少し不安でした。なぜならカンボジアの言葉を全く知らなかったからです。どのようにコミュニケーションをとればいいのか、ギリギリまで悩んでいました。しかし、実際に学校に行ってみると、身ぶり手ぶりでコミュニケーションができるということがわかり、ほっとしました。

このことから、言葉だけでなく伝えようとする気持ちが大切だということ学びました。今後、この経験を生活にいかして行きたいと思います。

カンボジアに行つて

内野小5年 尾川 薫

ぼくがカンボジアに行つて印象に残ったことがあります。それは、交流会で子どもたちが初

多く、また、はだしでいる子どももとても多かったです。プノンペン市内では、ゴミの山で生活している子を見かけたりもしました。

その事から、日本と比べてみるとカンボジアは裕福な国ではありません。その事も考えながら、これからもカンボジアへのさまざまな活動ががんばっていききたいです。

カンボジアで学んだこと

佐敷小6年 遠山 穰

私が、カンボジアで学んだことは2つあります。1つ目は、水の大切さです。カンボジアでは、水道水を飲んではいけないからです。私は今まで、飲み水に困ったことはありませんでした。現地でもペットボトルの水が配られ、不自由はありませんでしたが、5日間、水道水を飲めなかったことは初めてでした。日本の水がどれだけ衛生的でありたいことなのかを初めて実感しました。

2つ目は、豊かさの違いです。日本では、みんな靴をはいています。カンボジアはそうではありません。日本と比べて整備されていない道路

カンボジアの子供たちと

大野小5年 田中美実

私は、カンボジアに行つて来ました。一番に残ったことは、子供達の想像の豊かさです。何でも人に頼らずに、自分のことは自分でしていたので、とてもすばらしいことだと思います。私も、見習いたいと思いました。そして、カンボジアの子供たちは貧しい暮らしをしているのに、みんなにやさしくしてくれているので嬉しかったです。今後は、カンボジアの子供たちのように人に優しく接したいと思えます。

カンボジア派遣事業で思ったこと

大野小6年 一村満輝

ぼくがカンボジアに行つて思ったことは、カンボジアの人達は笑顔でいるということです。カンボジアの人たちは、ほとんどの人がお金がなくて貧しい暮らしをしているのに、日本人たちより明るく笑顔で僕達に接してくれたからとてもうれしかったです。日本の子どももみなならわなければいけないなあと思いました。だから、僕はカンボジアを支援し続け、募金し続けたいと思います。あと、カンボジア以外にも貧しい国があったら支援したいと思いました。最後にカンボジアに5校目の学校ができたら行ってみたいと思いました。

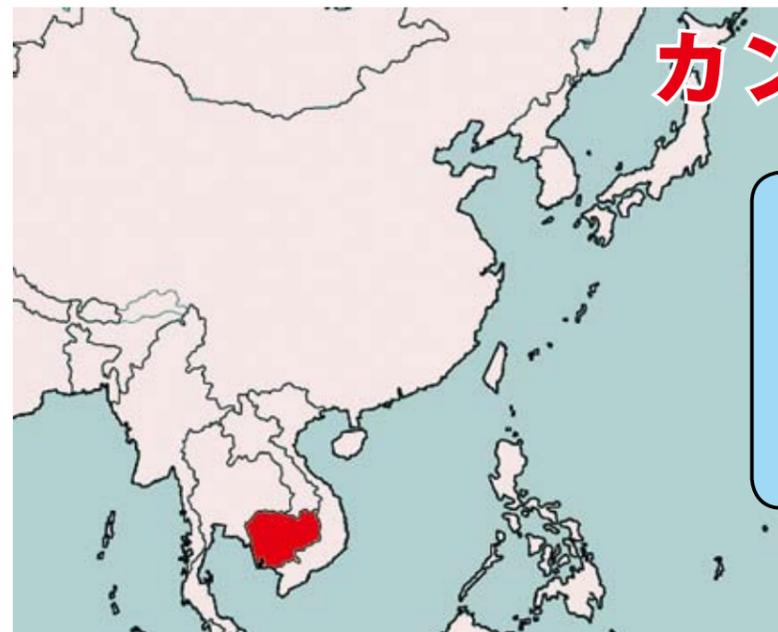
カンボジア学校贈呈 ・派遣事業のあゆみ

- ★平成8年 募金活動開始
- ★平成13年3月 「芦北ひまわり学校」贈呈式に派遣団30人が参加
- ★平成13年6月 竹崎町長が来日中のフン・セン首相を表敬訪問
- ★平成14年8月 「芦北ひまわり第2学校」贈呈式に派遣団30人が参加
- ★平成15年9月 「あしきたひまわり今村学校」贈呈
- ★平成16年8月 今村学校での交流会に派遣団21人が参加
- ★平成19年3月 カンボジアスタディツアーに派遣団22人が参加
- ★平成21年12月 「芦北ひまわり第4学校」贈呈式に派遣団31人が参加

平成8年から継続して行ってきた「カンボジアに学校を贈る運動」の取り組みにより、今回を含め4校の学校を贈呈し、それぞれ学校贈呈式やスタディツアーに延べ134名（うち小中高生76名）が派遣されました。

	贈呈年月	学校名	場所
1校目	平成13年3月	芦北ひまわり学校	シアヌークビル市バオットセイモン村
2校目	平成14年8月	芦北ひまわり第2学校	プノンペン市センソック村
3校目	平成15年9月	あしきたひまわり今村学校	コンポンチャム県チュレイタソー村
4校目	平成21年12月	芦北ひまわり第4学校	プレイベン県スワイサカウ村

カンボジア王国



人口：約1,300万人
 面積：181,035km²（日本の約半分）
 貨幣：リエル（USドルも流通）
 ※1円=約40リエル
 政体：立憲君主制
 首都：プノンペン
 言語：クメール語
 宗教：仏教（人口の約97%）

メコン河が流れるインドシナ半島の中央に位置するカンボジア。年間を通して気温30度を超えるとても暑い国です。
 12世紀から13世紀にかけて全盛を迎えたクメール王朝によって造られた「アンコール・ワット」を始めとした遺跡群は世界遺産として登録され、現在、世界中から観光客が訪れています。
 1953年、カンボジアはフランス統治の時代を経て独立したものの、70年代には内戦に見舞われ、特に75年からのポル・ポト政権が支配した時代には、学校教育はおろか、伝統文化、家族など多くのものが否定され、数百万人とも言われる人々が虐殺されました。その後93年に新生カンボジア王国が誕生し、現在は治安や経済などの復興へと着実に歩みを進めています。
 現在の首都プノンペンは人口130万人を擁する政治・経済の中心地で、経済成長が著



カンボジアの子供（スワイサカウ村にて）
 現在、ほとんどの子供が小学校に入学しますが、5年生まで進学する子供は56%に留まっています。



カンボジアの農村地帯
 全体の約7割の人が農業を営んでいます。機械化されておらず、手作業や水牛などによる昔ながらの耕作が続けられています。



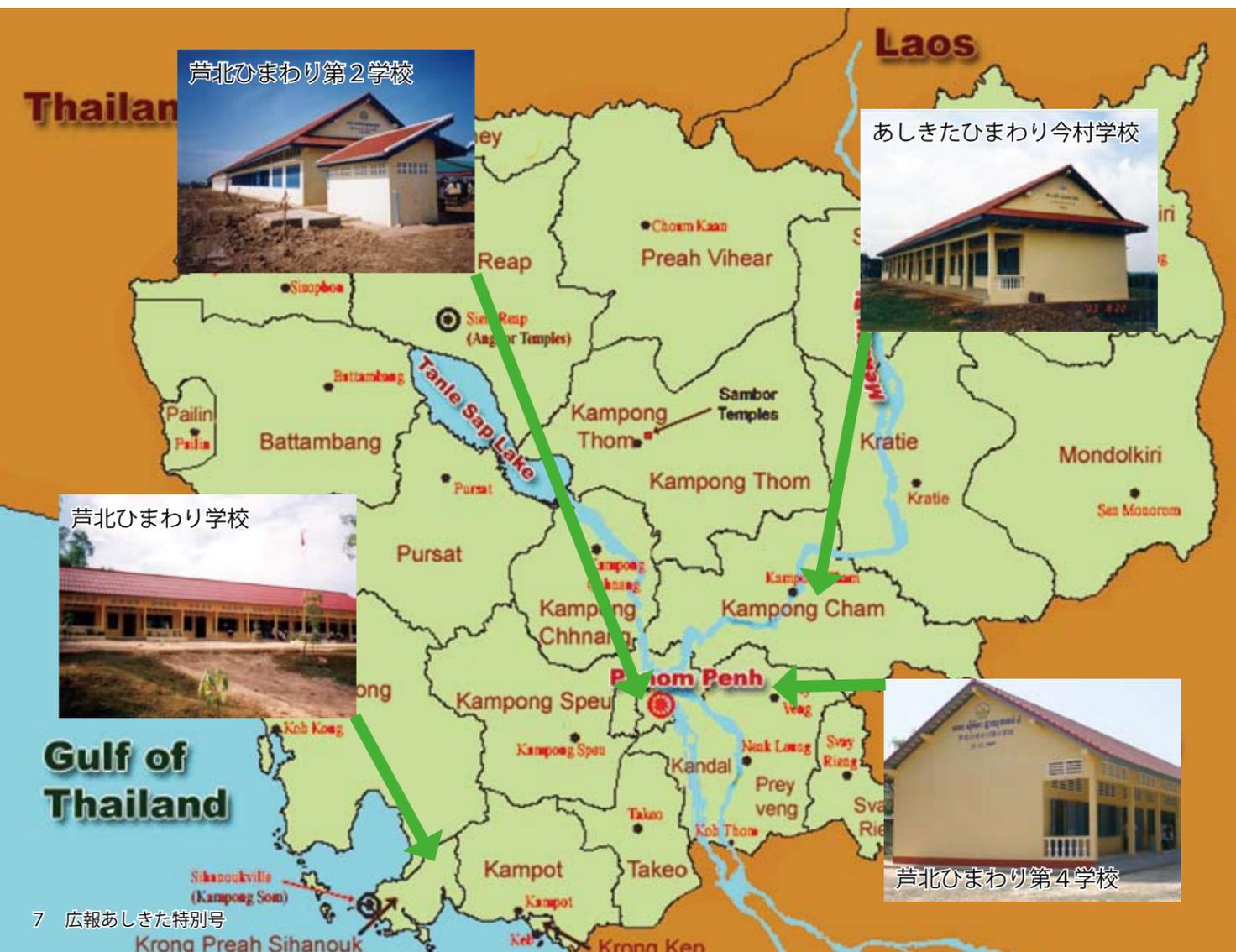
ポル・ポト政権時代の収容所跡地
 教師や医師などの知識層を中心に強制的に収容し、拷問されたあと虐殺されました。



プノンペン市内の様子
 プノンペンでは、2人に1台の割合でバイクを所有しており、交通量も年々増加しています。

しく、市内はたくさんバイクでごった返し、活気にあふれています。農村部は見渡す限りの農地が広がり、人々は稲作を中心とした農業

を営んでいます。生活水準の格差が大きく、学校に行くことができない子供達も数多く存在しています。



カンボジア派遣事業レポート

佐敷小6年 丸山真由子

24日、6時に役場に集合しました。それからバス、飛行機と移動で大変だった1日でした。25日、4校目の小学校で贈呈式がありました。子供達のたくさん笑顔があふれていて、ステキなところだなと思いました。JICAの事務所での説明があり、JICAがどんなボランティア活動をしているのかが、分かりました。26日、この日印象に残っているのは、CCHとツール・スレン博物館

館です。CCHでは、親がいないのに明るく過ごしていたのが残りました。ツール・スレン博物館では、たくさん悲しみがつまっていて、印象に残りました。27日、世界遺産の迫力に驚きました。28日もキレイなお寺を見て感動しました。普段学べない貴重な体験をしました。

カンボジアに行つて

田浦小6年 藪下真央

ぼくが一番心に残ったのは、現地の子とも達との交流会です。最初は、「言葉は通じるかな。」と心配でしたが、

が、勇気を出して話しかけてみると、言葉は関係ありませんでした。折り紙をしたり、絵をかいたりして、すごく楽しかったです。また、現地の子とも達の笑顔がとても明るくて、見ていてほくも楽しくなりました。身なりは裕福ではないけど、楽しいことを「楽しい」と素直に表情に表している姿を見て、ほくも見習わなくてははいけないと思いました。

カンボジアに行つた感想

田浦中1年 石橋 遥

私がカンボジアに行つて印象に残っていることは、まず、メコン川を渡る時に、物売りの人たちがいて、その中に、子どもで、しかも腕



校庭に「タイ桜」を植樹

がない7〜8歳くらいの子ともがいたことです。それを見ると、胸が痛くなりました。その後に行つた贈呈式の後の交流会では、竹とんぼやおり紙をカンボジアの子ともたちと一緒にしました。向こうの子供たちは、初めての体験に、とても目が輝いていました。私は、改めて日本が恵まれている事を学んだ気がします。



盛大な拍手で出迎える現地の子供たち

カンボジア派遣事業に参加して

佐敷中1年 河添彩音

カンボジア派遣事業に参加した6日間は、驚きと感動の連続でした。大歓迎してくれた現地の子ともたちから、学校生活はすごく楽しいと話

を聞き、とても嬉しかったです。私は今まで毎日おいしいごはんを食べたり学校に通ったり、欲しい物を買ったりする事を当たり前に生活していましたが、とても有難く幸せなことだと気付きました。

この感謝の気持ちをずっと忘れずに、カンボジアで出会った子どもたち

ちのようにこれからは何事にも積極的に挑戦していきたいです。今回学んだことをこれからの生活に生かしていけるよう頑張っていきたいです。

カンボジアに行つての感想

佐敷中1年 佐藤康平

僕は、カンボジアに行つて印象に残った事が2つあります。

1つ目はポルポトが本当にひどい事をしたという事です。それは、330万人の医者や弁護士、頭のいい人達を虐待したりしたからです。僕はその時政権のじゃまになるか



空手の形を披露する佐藤康平君

カンボジアで学んだ事

湯浦中1年 宮本祐希

ぼくは、カンボジアに行つて学んだ事が2つあります。1つ目は、学校に行けなくても、

らつて平気で人を殺す事は絶対にいけない事だと思いました。2つ目は現地の子供と楽しく交流した事です。折り紙で飛行機や鶴と一緒に折り、飛ばすと喜んでくれて嬉しかったです。カンボジアに行つて歴史や文化、様々な事を学びました。学んだ事を生活面、学習面で生かしたいと思います。



短時間の交流でも友達に



あやとりで交流

仕事をして、生活しているからです。日本では、ありませんが、カンボジアでは、よくある事です。2つ目は、親がいなくても、周りの仲間と協力して、日々生活している事です。特にCCHで140人ぐらいで、日々生活していたので、悲しいと思つたけど、すごいと思つきました。

これからは、カンボジアで学んだ事を忘れずに生活していきたいです。そして、国際社会への貢献をしていきたいです。

※CCH、ゴミ山で生活していた孤児を支援するためJHP・学校をつくる会が創設した児童擁護施設。

カンボジアに行つて、学び、
教えられたこと

大野中2年 一藤基子

私はカンボジアに行つて、たくさん
の事を学び、教えられました。そ
の中で特に心に残っている事につ
いて書きます。交流の時の子ども達を
見ると、みんな、何にでも挑戦しよ
うとするし、失敗してもあきらめず
に何度もやってみるし、知りたい事
や分からない事があつた時は、「教
えて」ときちんと言つ事が出来ます。
子ども達からは勉強したいという強
い意欲が感じられました。

そして交流の中では、折り紙一枚
も取りあいになるくらいの人気が
ありました。私も物を大切にしないと
思いました。途中で見せてくれた笑顔
が印象的です。

カンボジア派遣事業に参加
して

若北高校1年 大松詩歩

私は今回、カンボジア派遣事業に
参加して一番の思い出は贈呈式や交
流です。交流を通して現地の子とも
達の積極さや、会話をして楽しそう

にしている姿を見て本当に嬉しかつ
たですし、そのおかげで自然と笑顔
になりました。違う国でも一生懸命
話そうとすれば伝わるんだと思い、
おかげで形にならない大切なこと
を学べました。

今、当たり前前に学校に通っている
一日一日が本当に幸せなんだとい
うことを実感しています。そして、カ
ンボジアの子ども達が目や輝かせ、
笑顔でいるあの可愛さは絶対に忘れ
ません。カンボジアで学んだことは
将来に繋がる経験ばかりでした。

カンボジア派遣事業に参加
して

若北高校1年 才林千春

私がカンボジア派遣事業に参加し
て一番印象深かったことは、贈呈式
後の現地の子とも達との交流です。
たくさんの子とも達と会話をしまし
た。その時の子ども達の目の輝きや
笑顔に出会えたことで本当に参加し
て良かったなと思えました。実際に
行つてみてカンボジアの厳しい現状
を目にして自分だけでなく良い環境
で育つてきたのかと考えさせられま
した。

また、班長をやつてきたことで積

5校目の建設に向けて

カンボジアに学校を贈る運動の
先駆けとなった佐敷小学校で
は、平成8年から不要品販売による
チャリティーバザーを続けていま
す。15回目を迎えた今年も1月22日
全校児童と保護者の協力により、盛
大に行われました。ペットボトルな
どを利用したポウリングやマッサー
ジサービスなど、趣向を凝らしたバ



恒例の佐敷小チャリティーバザー

ザーは好評で、1時間半ほどでほぼ
完売となりました。12万5千円余り
の益金は、カンボジア学校建設募金
に寄贈されました。同小からの募金
累計は259万円となりました。

大野小学校では、平成17年から
JJAあしきたの協力により、
カンボジア募金米づくりを行つてい
ます。「食育」を実践しながら「国
際貢献」もできるこの取り組みは、
子供たちが育てた
大野米を国際交流
まつりなどで販売
し、その益金を募
金するというもの
です。今年度から
は冬季のサラ玉づ
くりにも挑戦して
います。

その他の学校に
おいても、児童会
や生徒会を中心と
した取り組みによ
り、これまでに多
くの募金が寄せら
れました。



←内野っ子まつりでのチャリティーバザー
↓大野小カンボジア募金米づくり



子供たちの笑顔が満開



極性を身につけられた5泊6日に
なつたと思います。その積極性を学
校生活でも生かしていきたい自分の将来
にも繋げていきたいです。この事業
に参加して良かったです。

カンボジア派遣報告会



1月31日、きずなの里においてカン
ボジア派遣事業報告会を開催しました。
派遣者が学校贈呈式や交流の様子を写
真や映像を交えて発表しました。



世界遺産アンコール・ワットにて

カンボジアに学校を贈る募金にご協力を

芦北町国際交流協会では、カンボジア学校建設募金箱を設置していただける事業所、商店、施設等を募集しています。

ご協力いただける場合は、芦北町国際交流協会事務局までご連絡ください。



現在募金額 1,171,215円

(平成22年3月1日現在)

5校目の建設に向けて募金にご協力をお願い致します。

カンボジア学校建設募金

【指定口座】あしきた農協 本所 (普通) 0001881 カンボジアに学校を作る募金

※お問い合わせ 芦北町国際交流協会事務局 (芦北町役場企画財政課内)

☎0966-82-2511 (内線252)

2010
特別号

発行日/平成22年3月11日
発行/芦北町 編集/総務課

〒869-5498 熊本県葦北郡芦北町大字芦北2015
TEL 0966-82-2511 / FAX 0966-82-2893
<http://www.ashikita-t.kumamoto-sgn.jp>